

ヨナ書

ジェイムズ・ジェイコブ・プラッシュ

ヨナ書を開く前に、使徒の働き 2 章 24 節から 27 節を少し読んでみましょう。

『しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。』(24 節)

27 節はイザヤ書と詩篇からの引用です。『あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、あなたの聖者が朽ち果てるのをお許しにならないからである。』(27 節)

イエスをその死の力につないでおくことは不可能でした。聖書的にも、靈的にも、論理的にもありえないことだったのです。

ヘブル人への手紙では、アブラハムが自分のひとり子をいけにえ—イエスの象徴—としてささげたとあります。なぜなら、みこころを成就するために神は死者をよみがえらせることもできると知っていたからです。(ヘブル 11 章 17 節)これは“死の状況”に置かれた者が、復活の力を持つことができるという確信を神に与えられる一つの例です。

これらのことを頭に入れながら、預言者ヨナの書を開いてみましょう。

1 アミタイの子ヨナに次のような主のことばがあった。

2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。」

3 しかしヨナは、主の御顔を避けてタルシシュへのがれようとし、立って、ヨッパに下った。彼は、タルシシュ行きの船を見つけ、船賃を払ってそれに乗り、主の御顔を避けて、みなといっしょにタルシシュへ行こうとした。

4 さて、主は大風を海に吹きつけられた。それで海に激しい暴風が起り、船は難破しそうになった。

5 水夫たちは恐れ、彼らはそれぞれ、自分の神に向かって叫び、船を軽くしようと船の積荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船底に降りて行って横になり、ぐっすり寝込んでいた。

6 船長が近づいて来て彼に言った。「いったいどうしたことか。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願いしなさい。あるいは、神が私たちに心を留めてくださって、私たちは滅びないですむかもしれない。」

7 みなは互いに言った。「さあ、くじを引いて、だれのせいで、このわざわいが私たちに降りかかったかを知ろう。」彼らがかくじを引くと、そのくじはヨナに当たった。

(箴言 16 章 33 節には『くじは、ひざに投げられるが、そのすべての決定は、主から来る。』とあります。)

8 そこで彼らはヨナに言った。「だれのせいで、このわざわいが私たちに降りかかったのか、告げてくれ。あなたの仕事は何か。あなたはどこから来たのか。あなたの国はどこか。いったいどこの民か。」

9 ヨナは彼らに言った。「私はヘブル人です。私は海と陸を造られた天の神、主を恐れています。」

10 それで人々は非常に恐れて、彼に言った。「何でそんなことをしたのか。」人々は、彼が主の御顔を避けてのがれようとしていることを知っていた。ヨナが先に、これを彼らに告げていたからである。

11 彼らはヨナに言った。「海が静まるために、私たちはあなたをどうしたらいいのか。」海がますます荒れてきたからである。

12 ヨナは彼らに言った。「私を捕らえて、海に投げ込みなさい。そうすれば、海はあなたがたのために静かになるでしょう。わかっています。この激しい暴風は、私のためにあなたがたを襲ったのです。」

13 その人たちは船を陸に戻そうとこいだがだめだった。海がますます、彼らに向かって荒れたからである。

14 そこで彼らは主に願って言った。「ああ、主よ。どうか、この男のいのちのために、私たちを滅ぼさないでください。罪のない者の血を私たちに報いないでください。主よ。あなたはみこころにかなったことをなさるからです。」

15 こうして、彼らはヨナをかかえて海に投げ込んだ。すると、海は激しい怒りをやめて静かになった。

16 人々は非常に主を恐れ、主にいけにえをささげ、誓願を立てた。

17 主は大きな魚を備えて、ヨナをのみこませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた。

その魚はくじらであると書かれてはいません。ユダヤ人はこれを文字通りに現代ヘブライ語でレビアタンと訳します。くじらは地中海の固有の生物ではなく、私たちはそれがどんな魚であったかを知る由はありません。私たちはただそれがくじらであったのではないかと推測します（厳密に言えばもちろん、くじらはえらが無いので哺乳類であって魚類ではありません）。

1 ヨナは魚の腹の中から、彼の神、主に祈って、

2 言った。「私が苦しみの中から主にお願いすると、主は答えてくださいました。私がよみの腹の中から叫ぶと、あなたは私の声を聞いてくださいました。

3 あなたは私を海の真ん中の深みに投げ込まれました。潮の流れが私を囲み、あなたの波と大波がみな、私の上を越えて行きました。

4 私は言った。『私はあなたの目の前から追われました。しかし、もう一度、私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです』と。

5 水は、私ののどを絞めつけ、深淵は私を取り囲み、海草は私の頭からみつきました。

6 私は山々の根元まで下り、地のかんぬきが、いつまでも私の上にあります。しかし、私の神、主よ。あなたは私のいのちを穴から引き上げてくださいました。

7 私のたましいが私のうちに衰え果てたとき、私は主を思い出しました。私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。

8 むなしい偶像に心を留める者は、自分への恵みを捨てます。

9 しかし、私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえをささげ、私の誓いを果たしましょう。救いは主のものです。」

10 主は、魚に命じ、ヨナを陸地に吐き出させた。

1 主は、魚に命じ、ヨナを陸地に吐き出させた。

2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、わたしがあなたに告げることばを伝えよ。」

3 ヨナは、主のことばのとおり、立ってニネベに行った。ニネベは、行き巡るのに三日かかるほどの非常に大きな町であった。

4 ヨナはその町に入って、まず一日目の道りを歩き回って叫び、「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる」と言った。

ここでの“滅ぼされる”という言葉は“ネハパク(*nechpakeh*)”というもので、創世記でソドムが滅ぼされたときに使われた同じ言葉であり、トーラーに記されている一番悲惨な破壊と裁きのときに使われた言葉です。この特定の単語を使うことによって、神はソドムとゴモラに行ったことを思い起こさせているようです。

5 そこで、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで荒布を着た。

6 このことがニネベの王の耳に入ると、彼は王座から立って、王服を脱ぎ、荒布を

まとい、灰の中にすわった。

7 王と大臣たちの命令によって、次のような布告がニネベに出された。「人も、獣も、牛も、羊もみな、何も味わってはならない。草をはんだり、水を飲んだりしてはならない。

8 人も、家畜も、荒布を身にまとい、ひたすら神にお願いし、おのおの悪の道と、暴虐な行いから立ち返れ。

9 もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りをおさめ、私たちは滅びないですむかもしれない。」

10 神は、彼らが悪の道から立ち返るために努力していることをご覧になった。それで、神は彼らに下すと言っておられたわざわいを思い直し、そうされなかった。

1 ところが、このことはヨナを非常に不愉快にさせた。ヨナは怒って、

2 主に祈って言った。「ああ、主よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわいを思い直されることを知っていたからです。

3 主よ。今、どうぞ、私のいのちを取ってください。私は生きているより死んだほうがましですから。」

4 主は仰せられた。「あなたは当然のこのように怒るのか。」

5 ヨナは町から出て、町の東のほうにすわり、そこに自分で仮小屋を作り、町の中で何が起るかを見きわめようと、その陰の下にすわっていた。

6 神である主は一本のとうごまを備え、それをヨナの上をおおうように生えさせ、彼の頭の上の陰として、ヨナの不きげんを直そうとされた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ。

7 しかし、神は、翌日の夜明けに、一匹の虫を備えられた。虫がそのとうごまをかんだので、とうごまは枯れた。

8 太陽が上ったとき、神は焼けつくような東風を備えられた。太陽がヨナの頭に照りつけたので、彼は衰え果て、自分の死を願って言った。「私は生きているより死んだほうがましだ。」

9すると、神はヨナに仰せられた。「このとうごまのために、あなたは当然のこのように怒るのか。」ヨナは言った。「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」

10 主は仰せられた。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。

11 まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」

ここはとても乾燥した気候であったことを理解してください。—ただエアコンが効いていないようなものではなく、とても厳しい状況だったのです。

ヘブライ語の本文にある右と左をわきまえないことは次のようなものです。『エルサレムよ。もしも、私がおまえを忘れたら、私の右手がその巧みさを忘れるように。(Im eshcacak yerushalim tishcah yemani)』(詩篇 137 篇 5 節) という箇所にあるように、“ヤド(yad)”という言葉と関連した“イエマニ(yemani)”という言葉が右(右手)にあたります。

聖書の中での主の右の手

『あなたの右の手が私を救ってくださいます。』(138 篇 7 節) イザヤもまた『私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は—同じヘブライ語のヤド—、だれに現われたのか。』(イザヤ 53 章 1 節) と書いています。旧約聖書の中の「右の手」とはイエスの象徴です。基本的に何を言っているかという、この異邦人たちは救いの道を知らず、彼らは右の手と左の手の違いさえ分からないほど、どうしたら良いかを分からない」ということなのです。主の右の手が救いをもたらします。これがヘブライ語によって暗示されていることです。

ヨナ書は驚くべき話ではありませんか。おそらくこれはヤロブアムの在位していた紀元前 814 年から 783 年の期間に書かれました。その時代に、あるアッシリアの王が唯神論者になったことを歴史から知ることができます。彼の名はアダデ・ニラリ 3 世(Adad-Nirari III)といい、だいたい紀元前 810 年から 782 年の間王として治めていました。(実際にエジ

プトのあるパロも唯神論者になり、バビロンのふたりの王も唯神論者になりました（ダニエル書を読んでみてください）そこに書いてある王が、本当の神に立ち返った王であるかもしれません。

ユダヤ人は旧約聖書の時代であっても絶えず異邦人の光となるように召されています。私たちが今しているような方法では、彼らは証をしません、イエスがヨハネ 4 章で言われたように、救いがユダヤ人から来るのなら、彼らは依然として国々に真実の神を示す証人となっているのです。今日、ラビたちは本来モーセに命じられたこと、真実の神へと人々を勝ち取るべきであることを忘れて、“クリスチャン”がユダヤ人を改宗させていることに文句を言っています。すべきことを彼ら（ユダヤ人）がしていないという事実を見ると、もはや本当のユダヤ教を実践していないことは明らかです。

ヨナの物語

ヨナは理由もなしにニネベに行きたくなかったわけではありませんでした。ニネベの人々は控えめに言っても、とても良い人たちとは言えませんでした。彼らは墮落した人々であり、完全に異教徒だったのです！それにもまして、聖書を信じるユダヤ人として、彼は先人であった預言者アモスの言葉を読んでおり、ニネベに関して命じられ予告されたことを知っていたことでしょう。なので、ヨナはそこに行かない**聖書的な理由**さえも持っていたのです。彼は神がその民にあわれみをかけ、自分が殺されるかもしれないと知っていただけでなく、ナホムが予告したように一見彼らに対しては裁きが宣告されているようであり（このことは後に彼らが異邦人の道に墮落したときに起こりました）、ヨナにはそこに行かないことに関してもっともな理由があったのです。

さて、それでは“ヨナ(Yonah)”という名前の意味を見てみましょう。それはヘブライ語で“鳩”を意味します。これから何を連想するでしょうか？ひとつはヨハネ 2 章 16 節のイエスが鳩を売っている者を神殿から追い出した箇所でしょう（レビ記 14 章から鳩はいけにえに適していると見なされ、それは他の動物がそうであるようにイエスの象徴でした）。また雅歌 1 章 15 節では愛する者に『あなたの目は鳩のようだ。』とされています。

なぜ目が鳩のようであるかという、鳩は一雄一雌の鳥であり、決まった連れ合いとしか関係を持たず、他の鳩と交尾をすることはない鳥だからです。なので、創世記 8 章でノアは後にトラーによって“汚れている”とされたカラスを先に放ちましたが、次に鳩を放ったのです。ユダヤ人の頭にはこれらすべてのことが思い起こされたことでしょう。これらのイメージはヨナのある側面を明らかにするものですが、おそらく最も重要なものはダビデの詩篇 55 篇 4 節－6 節に見出されます。

4 私の心は、うちにもだえ、死の恐怖が、私を襲っています。

5 恐れとおののきが私に臨み、戦慄が私を包みました。

6 そこで私は言いました。「ああ、私に鳩のように翼があったなら。そうしたら、飛び去って、休むものを。」

この書で表されている重要なテーマは自分に降りかかって来る苦難から逃れたいと思うことであり、ヨナこそ苦難から逃れようとした者でした。

しかし、この苦難についてはどうなのでしょう？ 私たちに対してどういう意味を持っているのでしょうか？ 私たちがヨナについて最初に理解しないといけないことは、**すべての**ヘブライ人預言者についてのことです。ヘブライ人預言者の一人ひとはイエスの象徴、メシアの象徴であり、すべての者が彼の予型となっています。彼らはメシアがどのような方で、何をされるかということ示していました。ヘブライ人預言者ならすべての者が、後にやって来て、自分たちが預言した贖いをもたらすメシアの予型であり、象徴であったのです。

イエスの象徴としてのヨナを見る

2 列王記 14 章 25 節を開いてください。ここでヨナが聖書で最初に登場します。

『彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。それは、イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェルの出の預言者アミタイの子ヨナを通して仰せられたことばのとおりであった。』

ヨナがユダヤ人という自分の民に**最初**は遣わされたということに注目してください。ただ**その後**に異邦人に遣わされました。マタイ 15 章 24 節には次のように書かれています。

『しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません」と言われた。』

イエスは最初ただ自分の民のもとに遣わされ、その後にユダヤ人以外のもとに遣わされた

のです。ヨナはカテ・エフェルという地の出身でした。ガテ・ヘフェルはナザレから歩いて行ける距離にあります。

ここでヨナについて知っておくべき事柄があります。

ヨハネ 7 章 52 節を開いてください—サンヘドリンはあることを見落としていました！『彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤの出身なのか。調べてみなさい。ガリラヤから預言者は起こらない。』」（また同じ章の 41 節で言われているように）『まさか、キリストはガリラヤからは出ないだろう。』と彼らは言っていました。ガリラヤから預言者は起こらないのでしょうか？彼らは間違っていました。ヨナはガリラヤ出身だったのです！イエスを除いてヨナは唯一ガリラヤ出身でした。

ヨハネ 1 章 4 節—6 節の中でひどい嵐が起きました。新約聖書における風というギリシア語は“ニューマ(*pneuma*)”であり、ヘブライ語ではもちろん“ルアハ(*ruach*)”です。またそのふたつの単語は同時に霊という言葉でもあります。神から送られた暴風の中で、ヨナは船の中で眠っており、他の人は取り乱していました。「いったいどうしたことか、嵐の中にある船で寝込んだりして」

(マルコ 4 章 6 章にある船について、わたしたちは船に関する象徴を深く説明しているテープを提供しています)

ここでマルコ 4 章 37 節から 38 節を簡単に見てみましょう。

37 すると、激しい突風が起り（七十人訳のギリシア語版のヨナの状況にとっても似ています）、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった。

38 ところがイエスだけは、ともなうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われな

いのですか。」

ヨナに起こったことは、主イエスに起こることの予型でした。ヨナはイエスの象徴となったのです。

ここでこのことについてさらに理解を深めましょう。ヨナ 1 章 12 節『私を捕らえて、海に

投げ込みなさい。そうすれば、海はあなたがたのために静かになるでしょう。』

ヨナは彼自身の選択によって、異邦人を含む人々に救いをもたらすため、自らのいのちをささげました。ヨハネ 10 章 17 節から 18 節にはこうあります。『わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。』

ヨナは自分のいのちを捨てて、人々に救いをもたらしました。ヨナが前もって示していたように、メシアは人々が救われるため自分のいのちを捨てました。

次にルカ 11 章 30 節を開いてください。『というのは、ヨナがニネベの人々のために、しるしとなったように、人の子がこの時代のために、しるしとなるからです。』

列王記からヨナはアミタイの子であったことが分かります。彼はヤロブアムの在位している期間に預言していました。（ヤロブアムという王がふたりいました。どちらも悪い王で悪い人でした。ふたりのヤロブアム王は一方が他方にひけ劣らないほど墮落していました）。ヨナの説教によってユダヤ人は悔い改めずに、異邦人が悔い改めました。イエスの語ったメッセージもそのとき大半のユダヤ人は受け入れませんでした。異邦人はそれを受け入れました。（ユダヤ人全員が彼を退け、ヨナを受け入れた者がひとりもいなかったというわけではありませんが）ヨナの時代に悔い改めたのはユダヤ人ではなく、もっぱら異邦人であり、イエスの時代に悔い改めたのもユダヤ人ではなく、もっぱら異邦人でした。

ヨナ 1 章 17 節では次のことが語られています。「主は大きな魚を備えた」

2 章 1 節 主が嵐を送られる

『ヨナは魚の腹の中から、彼の神、主に祈って、言った。「私が苦しみの中から主にお願いすると、主は答えてくださいました。』

主が嵐を送られ、大きな魚を備えました。これは“死の経験”です。ある人はヘブライ語の本文の“シェオル(Sheol)=よみ”という言葉の持つ意味から、ヨナは実際に生物学的に死んだのだと言います。しかし確かに言えることは、その意味合いは“死の場所”であったということです。主ご自身がヨナを死の場所に送ったのであって、主が彼を死に渡しました。

使徒 2 章 23 節には、『神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を』とあります。

またイザヤ 53 章 10 節には、『彼を砕いて、痛めることは主のみことろであった。』とあります。ヨナは神の予知によって滅びの場所に引き渡されました。イエスも神の予知によって滅びの場所に引き渡されました。ヨナは海の中で“死”を経験しました。（彼が死んだかどうかを議論する人もいるでしょうが、海の中でその“死”を体験したことは確かです）

ここで詩篇 69 篇を開いてみましょう。

これはもちろんダビデによる詩篇であり、ヘブライ的な詩のジャンルに属する文学であって、メシアに関する預言を含んでいます。たとえばこの詩篇の中の 21 節では、『彼らは私の食物の代わりに、苦味を与え、私が渴いたときには酢を飲ませました。』とあり、これは主イエスが十字架上で経験されたことです。しかしながら、イエスの死の始まりを予見しているこの詩篇は次のように始まります。

『神よ。私を救ってください。水が、私ののどにまで、入って来ましたから。』

比喩的にヘブライ的な預言では、イエスの死は溺れることにたとえられます。ところで、私たちは次のような素晴らしい賛美歌を歌っています。「安けさは川のごとく 心浸す時 悲しみは波のごとく わが胸満たす時」これはストックウッド(Stockwood)という人が作詞しました。しかし、この賛美歌について多くの人が知らず、私も 5、6 年前には知らなかったことは、この歌は今エルサレムのアメリカ人居留地がある場所で、彼の家族が溺れた後に書かれたものであったということです。“波のごとく”という歌詞は、自分の家族に起こったことであり、特に詩篇で用いられる聖書的な象徴であったのです。人がこのような死の経験をしたとき、溺れることをほのめかし、イエスを指し示すのです。

ヨナ書 3 章 8 節：ヨナが「悔い改めろ、悔い改めろ、神がこの町を四十日の間に滅ぼされるから」言ったときに、人も家畜も荒布をまとい灰をかぶり悔い改めました。また彼は「あなたがたが悔い改めれば、神は怒りをとどめられて赦されるかもしれない」（8 節にあるように）と言いました。

最近、私はある人から、予言したことが実現しなかった人を正当化している長いメールをもらいました。彼はリック・ジョイナー(Rick Joyner)やジェラルド・コーツ(Gerald Coates)を正当化し、「ヨナはにせ預言者だったのですか？」というような質問をしてきました。「ヨナの告げたことを見てください。それは起こらなかったでしょう。」これがに

せ預言者たちを正当化して用いた根拠です。しかし、ヨナ書の本文はとても明らかにそれが条件付きの預言であったことを示しています。それは「もし、あなたがたが悔い改めなければ、このことが起こる」と言われているのであって、ヨナは「これが起こる」とそこで終わりはしませんでした。条件付きのものだったのです。それは不適當な比較です。しかし、そのような人たちは文脈から離れて、聖書の言葉を曲げないと我慢ができないのです。

とはいえ、ヨナは「裁きが来るから悔い改めなさい。」という直接的なメッセージを語り、マタイ 4 章 17 節でイエスが『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから』と宣べ伝え始めたときのように、悔い改めのメッセージをもって裁きを回避できるようにしました。それはイエスや使徒たちのとった方法と同じです。『この曲がった時代から救われなさい』（使徒 2 章 40 節）

ヨナ 2 章 4 節：「私は言った。『私はあなたの目の前から追われました。』」ヘブライ語の本文はヨナが神の御前から退けられたと示しています。神は彼を見るに耐えず、見ようとせず、目の前から追い出したのです。マタイ 27 章 46 節を見ると『三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。』とあります。ヨナは神の目の前から追われ、ヨナに目を向けなかったように、イエスにも目を向けようとしなかったのです。

ヨナは三日三晩大きな魚の腹の中にいました。それはもちろんマタイ 17 章 39 節から 40 節にあるように、イエスの復活の象徴でした。ヨナが三日の間、魚の腹の中にいたように、イエスも三日の間墓の中にいたのです。他のすべてのイスラエルの預言者のように、ヨナはイエスの象徴でした。すべてのヘブライ人預言者が行ったように、来るべきメシアについて伝えたのです。彼らの生涯を注意深く読むなら、メシアについて何かしらのことを伝えていることが分かるでしょう。ヨナもその例外ではありません。

ヨナは死の経験へと渡されました。しかし、ヨナの人生には神さまの望む人になれなくする事柄がありました。

1. 従いたくない正当な理由があったので、神のみこころに反し、神が望んでおられることを拒みました。彼は遣わされた場所がアモスの語っていた国だと知り、民は墮落していると知っていました。自分が殺されるかもしれない場所に誰が行こうと思うでしょうか？

2. 第二に、神の持つあわれみに欠けていました。ヨナは神の裁きや怒りを理解していたとしても、神のあわれみには欠けていました。（イーディッシュ語でトレッチ(trech)というのですが）ヨナは文句に文句を重ねていました。神に従わない正当な理由を持ち合わせており、さらにその命じられたことはとても困難なものでした。好きでもない民のところへ行き、仲間ではないと知れ渡ると嫌われもするところだったのです。古代世界の言い方を借りると、ヨナは西からの者であり、彼らは東からの者でした。

ヨナはヘブライ人であったので、多神教ではなく真実の神の信者であり、西からの者であり、ヨナがそこに行くだけで東からの者にとっては格好の獲物となったのです。つまりヨナの不平は正当な理由からのものでした。人間的にいて、彼が気にかけていたことは妥当だったのです。神がそのような野蛮人たちに、なぜあわれみを抱いておられるのかが彼にとっては理解に苦しむところでした。

私にとってそれはあたかも、ロッカビー（スコットランドの南西にある地）の飛行機に爆弾をしかけ、私のイスラエル人の家族を殺そうとするイスラム原理主義者のもとに行くようなことであって、ホロコーストに責任がある世代のドイツ人に遣わされるユダヤ人のようなものです。人間的にいうと、ヨナが神のあわれみをこのような人たちに感じなかったのは、もっともな理由と言えるでしょう。ニネベ人は邪悪な人たちでした。

私たちの中のヨナ

ヨナには主の言葉が二度下ったと書かれてあります。ヘブライ語で言葉は“デヴァール (devar)”といい、ギリシア語では“ロゴス(logos)”です。言葉はメッセージを意味するより、むしろ“人”を表しています。イエスは旧約聖書における“ロゴス/デヴァーなる方”なのです。

もう一度言いますが、旧約聖書において聖霊は大祭司や王、預言者などの特定の人に特定の時期にしか下りませんでした。しかし、聖霊は今と同じように彼らにもイエスを伝えていました。

そこになかったのはイエスの人格だけで、イエス自身はそこにいました。“ことばが下った”と書かれている箇所は“主イエスが来られた”という意味です。それは旧約の時代におけるキリストとの顕れであったのです。アダムが園で神が歩くのを聞いたときも、それは主イエスでした。ヤコブがメタトロン（神の御使い）と格闘したときも、それは主イエスでした。イエスは新約の時代と同じように、旧約の時代にも姿を現わしていたのです。主のことばが下ったときには、彼らはキリストと実際に出会っていたのです。

あなたや私があまりしたがらないことを主が要求なさるとき、また自分の性格上、神に従いたくないことがあるとき、主はただあなたにメッセージを与えるだけではありません。主はあなたのもとに来られます。主イエスはあなたの前に立ち、あなたは彼を“見る”のです。一旦、主が来られると、そのメッセージは明瞭なものになり、自分の問題点を浮き彫りにするのです！それは人格との交わりであり、ただのことばやメッセージ、手紙、電報、ファックス、メールのようなものではなく、人格なのです。主イエスが来られて私たちの前に立たれると、私たちは自分の立場を理解します。

ヨナという名

現在、ヘブライ的な文化を持つユダヤ人の間では、一般的に亡くなった先祖の名前が子どもに付けられます。しかし、聖書の時代はイスラエルの歴史に登場する人物にちなんで聖書から名前を付けました。“～の子”ということばは生物学的な家系や血統などの子孫をただ単に意味しているだけではありません。ヘブライ的な考えでは、“～の性格を持った”という意味なのです。マタイ 16 章 17 節を開いてみると、『バルヨナ・シモン。あなたは幸いです』とイエスは言われました。（もちろんこれはヘブライ語ではなくアラム語ですが）ヘブライ語で言うなら“ベンヨナ”となるでしょう。（訳注...バル/ベンとは「～の子」の意味）さて、なぜイエスは彼のことを名前だけでなく、その姓とともに呼んだのでしょうか？彼の父の名がヨナであったことは真実ですが、それ以上の意味があります。ペテロの名がバルヨナであったことにも摂理が隠されていたのです。ペテロはヨナの性格を持っていたのです—これはあなたも私も当てはまる場所はあるでしょう。

この箇所ではピリポ・カイザリヤに来ていました。そこではギリシア人がパンという神を拝み、ローマ人はアウグストというカイザルを拝んでいました。マタイ 16 章 22 節において、ペテロはとても憤慨しており、イエスがこの聖なる地を汚す異教の民を裁き、その問題に対処してほしかったのです。それはヨナが異邦人を裁くように神に願ったこととまさに同じことでした。ヨナは異邦人のもとに行くことを拒み—ヨナの性質を持ったペテロも、使徒 10 章においてそうしました。そこでは、コルネリオと“汚れた食物（食物規定に合わない）”の話が出てきます。ペテロはヨナと同じように異邦人のもとに行くことを拒みました。「あなたはバルヨナです」「ペテロよ。ヨナの性質を持った者よ。あなたはギリシア人やローマ人のもとに行くことは好まない。ヨナも異邦人のところに行くことを望まなかった。あなたもそのようだ。彼はわたしが遣わすところに行こうとしなかった」

ヨハネ 21 章 18 節を見てみましょう。

『まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。』

ヨナの性質を持ったペテロは行きたがりませんでした。

ガラテヤ 2 章 11 節－12 節。

『ところが、ケパがアンテオケに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、私は面と向かって抗議しました。なぜなら、彼は、ある人々がヤコブのところから来る前は異邦人といっしょに食事をしていたのに、その人々が来ると、割礼派の人々を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行ったからです。』

ヨナはこれら異邦人と関わりを持ちたくありませんでした。またバルヨナ・ペテロも異邦人との関わりを嫌ったのです！

私には関わりたくない人がたくさんいます。私が幼い信者だったとき、私はとても酷い憎しみを、憎しみによる争いを経験しました。私はコリー・テン・ブームについての映画である『私の隠れ場』を見ました。その中でナチスがクリスチャンに対して行ったことと、オランダでユダヤ人を保護した信者たちに彼らが何をしたかを知りました。彼らが老人を殺し、女をレイプするなどをしたのです。それを知って私は激しい憤りにかられました。私は神さまが地獄を造ってくれたことを賛美しました。それはただナチスだけのためではなく、ドイツ人のために造ってくれていたことを感謝したのです。私はドイツ人を嫌っていたからです。イスラエルへのツアーを行うとき、私たちはヤド・バシェム(Yad vashem =ホロコースト記念館がある場所)に行きますが、私は中には入らずにバスに留まります。私は一度、ダッハウにある強制収容所を訪れたことがあります。その場所でユダヤ人の子どもたちが実験のために殺されました。私はそれが自分の子どもだったらと想像しました。『シンドラーのリスト(1993年)』という映画の中で身を隠していた女の子のことさえ頭に上りました。私の息子エリがその状況に陥っていることさえ想像できたのです。そのように私はドイツ人に対しての憎しみと戦っていました。

私の父は第二次世界大戦中アメリカ軍にいました。彼の家族はもとはマージサイド州の出であり、彼の母親もそこで育ちました。(彼女は戦争の前にそこを離れ、終戦後に戻ってきました)父がアメリカ海軍と共に戻ると、ドイツ人がリバプールに対して行ったことを見、彼の母親が育ったところまでも無惨に破壊されている光景を目の当たりにしました。そのこともあり、私はドイツ人に対して敵意を抱いていました。ドイツ人を私の周りに受

け入れることは、神さまの働きかけがありながらもとても大変なことでした。神さまは愛すべきドイツ人信者を送ってくださって、私の憎悪は消え去ったのです。

ある人はジプシーたちのことを「あいつらは詐欺師で謀略家たちだ」と言って受け入れることができません。しかし、主のあわれみを持った人もいて、彼らに福音を伝え、ジプシーたちはイギリスで最も勢いのある教会を作っています。彼らの生活は劇的に変わりました。

もうひとつの例を挙げましょう。私はイギリスに住んでいるときであっても、スピーカーズ・コーナーで福音を伝えているときなどに、イスラム教徒たちから暴行を受けました。これは

人種差別では全くありません。私はアジアのクリスチャンたちを愛しています。彼らは素晴らしい人たちであると思います。しかし、パキスタンやサウジ・アラビアでイスラム教徒がクリスチャンに対して行っていることを読んだとき、私は憤慨しました。アムネスティ・インターナショナルのホームページを見たときも怒りを覚えました。私の人生の中で最も大きな恵みであり楽しかったことは、ニュージーランドのオークランドでイスラム教について話しているとき、最近イランから来たシーア派のイスラム教徒が悔い改めて、イエスを信じ、ムハンマドとコーランを否定し、救われたときです。

私は、救われる前に反ユダヤ主義だった人たちのことを多く知っています。あるひねくれたユダヤ人の地主が三十年前にミリーおばさんに何か悪いことをしたから、ユダヤ人を嫌っていたりするのです。しかし、彼らが救われた後、自分でも理解できず説明もできないようなユダヤ人への愛と重荷を主は与えられます。

私たちは何も不合理ではない事情を抱えています。それは論理的でもあり、ときには明らかに聖書の論理にのっとなっているのです。ヨナがその人たちを嫌うのには理由がありました。彼はアモスがニネベについて語っていることを読み、神が何をなされるかも知っていて、彼の場合少しも不合理ではなく、合理的であったのです。人間的に言えば論理的で筋の通った理由があったのです。しかし神の持つあわれみを理解することはできませんでした。主のことばが私たちのもとに来て、私たちがイエスの前に立つとき、その人たちがどの程度悪いかは問題ではありません。自分と比べて彼らがどんなに悪くても、イエスに比べると私たちは皆はるかに邪悪なのです。あなたもそのようなことは分かっているはずで

「公営住宅に住む未婚の母たち。あなたたちが3人の不良たちと5人子どもを作ったのに、私たちがその子どもの世話をしています。私がなぜ人の家族の税金を払い、援助しなければ

ばならないのでしょうか。パブでつかまえた不良たちに彼らの子どもの世話をさせないのですか？なぜ私がしなければならないのでしょうか？」こう言うのは理性的ですが、その未婚の母たちに対してのイエスのあわれみはどこにあるのでしょうか。彼らがサッカーの試合でボトルを投げたりしているのを見ると、サッカーではなく、酔ってそうすること関心があるだけだと分かります—それはただの民族主義です。「もうそれならやっつけてしまえ」これが私の態度です。こう言うのは正しくないわけではありませんが、イエスのあわれみはどこにあるのでしょうか。私は不良が救われたり、イスラム教徒が救われたり、売春婦や薬物中毒者が救われた例を知っています。私とその一人であったからです！イエスのあわれみはどこにありますか？

というわけで、ヨナは嵐の中、海に吸い込まれたのです。神はヨナを死に定め、トルコカテルアビブのどこかで魚の腹の中に放り込みました。この特別な経験は聖書の中で、死の後にあるいのちを神学的に教えています。また、これはイエスに起こるべきことを明らかにしている事柄でもあります。それは私たちの罪のために十字架上で死に、父なる神に見捨てられ、よみに下ったイエスが父に呼び戻された時のことです。使徒2章24節を読むと、死はイエスをとどめておくことができず、墓も彼の力に耐えられず、死そのものもイエスを押さえておくことが出来なかったとあります。

2コリント4章8節–14節を開いてみましょう。

8 私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれています、行きづまることはありません。

9 迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。

10 いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。

11 私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。

12 こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのです。

13 「私は信じた。それゆえに語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っている私たちも、信じているゆえに語るのです。

14 それは、主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたといっしょに御前に立たせてくださることを知っているからです。

預言者ホセアがホセア書 6 章 2 節で書いたように、イエスの死は私たちの死であるので、主イエスの復活は私たちの復活でもあるのです。『主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。』（ホセア 6 章 2 節）イエスの死は私たちの死であり、彼の復活は私たちの復活であるのです。死はイエスをとどめておくことが出来たでしょうか？できませんでした。死はあなたや私をとどめておくことができるでしょうか？主イエスのゆえにそれは不可能です！私の人生の中で、神が私に本当に望んでおられることや、みこころを邪魔するものは溢れんばかりあります。ときには、自分の首（※彼は以前首を痛めました）のことで不満を言ったり、今流行っていることに賛成しないがために評判の良い教会から退けられたりして不満を言うときには、自分自身が死に定められていると感じることもあります。しかし、外国で起きている迫害を記したニュースレターを受取り、刑務所に入れられ人間以下の貧しい暮らしをして、その家族も生計を立てることすらできないクリスチャンがいることを読むと、私などが何の不満を言う権利があるのかと思います。私の子どもはあたたかい家で暮らしています。私は首を痛めているけど、薬を持っているのです。首に怪我を負っていても、薬を買うお金が無い人もいます。もし首がけいれんを起こしても、私は錠剤をいつも肌身離さず持っています。主にある兄弟たち、私などが死に定められているとどうして言えるのでしょうか。

真実を伝える奉仕がいつもお金に困っており、教えが墮落している者が荒稼ぎをしているのはなぜなのでしょう。なぜなら、そのような人はお金のために奮闘しているからです—そしてその墮落した教えを広めています！誠実な奉仕は真実を広めようとしません—そういう人は苦勞し、神を頼るしかないのです。死は私の内に働きます。主よ、私は真実を伝えているだけなのになぜでしょうか？私はただ三位一体を支持していただけであったのに、モリエルミニストリーズの一員であった人が数週間前に、私の名前を使って三位一体を否定する人たちを承認するようなことをし始めました。私が証人台に立ったとき、彼らは中傷し、私が自動車事故のために精神的に不安定になっているのだと言いました。私は不安定であったかもしれませんが—しかしそれは事故のためではありません—こんなことはもうたくさんです。この人たちがしていたことはよこしまでしたが、それよりも重要なことは、なぜ神がこのようなことが起こるのを許したかということです。神はこのことを通して何を言わんとしているのでしょうか？彼らは神が対処してくれますが、私には何を語られているのでしょうか？今あるように私が首を痛めたとき、（もうすぐ錠剤を飲みますが）神は何を望まれていたのでしょうか？あなたが魚の腹の中にいるとき、神は何を望んでおられるのでしょうか。イエスは自分をヨナのような者であると言ったことを思い出してくだ

さい。神ご自身が私たちを御前から追い払われたように思えます。自分たちは合理的だと思える（少なくとも不合理ではない）行動を取っています。自分にとって良い都合を持っていますが、今この悪い状況の中にいます。いやな仕事であったり、また仕事が無かったり、経済的に困窮していたり、健康面の問題であったり、教会内の問題であったり、奉仕の問題や家族の問題、結婚の問題、たくさんの問題が溢れているのです！あたかも私たちが御前から追い払われたようであり、墓の中に入れられたように感じます。ニネベ人でもなく、モルモン教やイスラム、不良少年や娼婦ではなく、**私たちが墓の中に入れられているのです！**

私たちは御前から追い払われました。しかし、死がイエスをとどめておくことができなかつたように、私たちも死にとどまってはいません。私は何度も強調して言っていたことですが、試練に遭わないことが真実なクリスチャンの証ではなく—反対に試練が何も無いのならクリスチャンではありません—私たちがこの世にあって患難があるということです。クリスチャンの証拠とは魚の腹の中に行かないことではなく、その中にいるときに何が起こるかということです。

詩篇 18 篇 4 節—6 節を見てください。この箇所にはヨナが魚の腹の中にいるときに起こったことと、とてもよく似た点があります。

4 死の綱は私を取り巻き、滅びの川は、私を恐れさせた。

5 よみの綱は私を取り囲み、死のわなは私に立ち向かった。

6 私は苦しみの中に主を呼び求め、助けを求めてわが神に叫んだ。主はその宮で私の声を聞かれ、御前に助けを求めた私の叫びは、御耳に届いた。

私たちは彼の御顔の前から退けられたかもしれませんが、神の耳は開かれています。

『あなたの大滝のとどろきに、淵が淵を呼び起こし、あなたの波、あなたの大波は、みな私の上を越えて行きました。』（詩篇 42 篇 7 節）これはちょうどヨナの状況と同じです。

詩篇 116 篇 3 節—9 節

3 死の綱が私を取り巻き、よみの恐怖が私を襲い、私は苦しみと悲しみの中にあつた。

4 そのとき、私は主の御名を呼び求めた。「主よ。どうか私のいのちを助け出してください。」

5 主は情け深く、正しい。まことに、私たちの神はあわれみ深い。

6 主はわきまのない者を守られる。私がおとしめられたとき、私をお救いになった。

7 私のたましいよ。おまえの全きいこいに戻れ。主はおまえに、良くしてくださったからだ。

8 まことに、あなたは私のたましいを死から、私の目を涙から、私の足をつまずきから、救い出されました。

9 私は、生ける者の地で、主の御前を歩き進もう。

この体が滅んでしまっても、よみがえりがあり千年王国があります。

15 節：『主の聖徒たちの死は主の目に尊い。』私たちは死んでも、イエスを死者の地で見るのではなく、生きている者の地で見ます。ヨブはどう言っているのでしょうか？（ヨブ 19 章 25 節－27 節）

25 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。

26 私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。

27 この方を私は自分自身で見る。私の目がこれを見る。ほかの者の目ではない。私の内なる思いは私のうちで絶え入るばかりだ。

人生の谷底に落ちたとき、あなたは神の御前から退けられています。あなたの持つ論拠は（少なくとも自分にとって不合理ではなく）合理的で、聖書に関しても論理的であるかもしれせん。しかし、あなたは魚の腹の中において、波はあなたを越えていき、溺れかけているのではなく、もう溺れてしまっているのです。よみのかんぬきがあなたを閉じ込め、主を見ることさえも出来なくなります。あなたは御前から退けられたからです。しかし、その中で神は**見ている**のではなく、**聞いておられる**と詩篇は言っています。神が祈りを聞かれた、ただその後に、魚はヨナを砂浜に吐き出しました。ヨナは魚の胃袋の中身を見てとても臭かったはずでしたが、彼には行動を起こす準備ができていました！このような混乱を通り抜けてきたなら、あなたは格好良くは見えないことでしょう。